

令和7年7月15日

No. 249

日立理科クラブ通信



日立理科クラブ

授業支援 南極観測隊(越冬隊)体験談 油縄子小



授業支援「南極観測隊(越冬隊)体験談」が、7月14日(月)油縄子小学校にて開催されました。講師は、元南極観測隊員の滝川 清さん(16次、27次)、上原 勝彦さん(20次)、田端 志野さん(65次)の3名です。

講師の田端さんは、65次越冬隊として2023年11月から2025年2月まで南極に派遣され、主に発電機の制御に携わってきました。田端さんから、南極観測の歴史、砕氷船「しらせ」、越冬隊の生活、南極の自然等について体験に基づくお話を頂きました。

<自己紹介>

小学校時代にはマーチングバンド、高校まで吹奏楽に全力で取り組んだ。プログラミングを学びたいと工業高校に進み、入社後も勉強を続けた。

<南極での体験>

南極大陸は広大な氷で覆われ、極寒と乾燥の厳しい場所、人間が住むには厳しく、手つかずの自然が残る、地球最後のフロンティアである。

南極への道のりは14,000 km。これは、国際宇宙ステーション(宇宙)よりも遠いともいえる。そこへは、砕氷船「しらせ」で暴風圏を乗り越え、ラミングで氷を割りながら進んでいく。途中、ペンギンやアザラシとの出会いもある。

南極地域観測隊は、地球全体の環境変動や地球の謎の解明を調査している。観測系とそれを支える設営系の役割がある。越冬隊は30名、厳しい冬を過ごす。昨年の最低は-37.4度、ブリザードが吹き荒れる極寒の世界である。冬の時期には見事なオーロラを見ることができる。

<南極観測隊員になるためには>

研究者、メーカー等からの派遣、極地研からの募集の3パターンがある。なるためには、健康であること、忍耐力があること、専門性があることが大切である。「自分は何がしたいのか」をよく考え、将来を描いてほしい。



南極の映像も紹介されました。砕氷船「しらせ」が暴風圏の大波を乗り越える様子やラミングで氷を割りながら進む様子は迫力があります。厳冬期のブリザードは風で体が飛ばされそうで恐ろしさを感じます。緑色のオーロラは幻想的でした。

体験コーナーには、南極の氷が用意され、氷に閉じ込められた1~2万年前の空気のはじける音を聞きました。講師の滝川さんから、南極の氷の説明を頂きました。他にも、防寒着、南極の石、ペンギンの剥製が展示され、5、6年の児童にとって、貴重な学習の機会となったようです。

